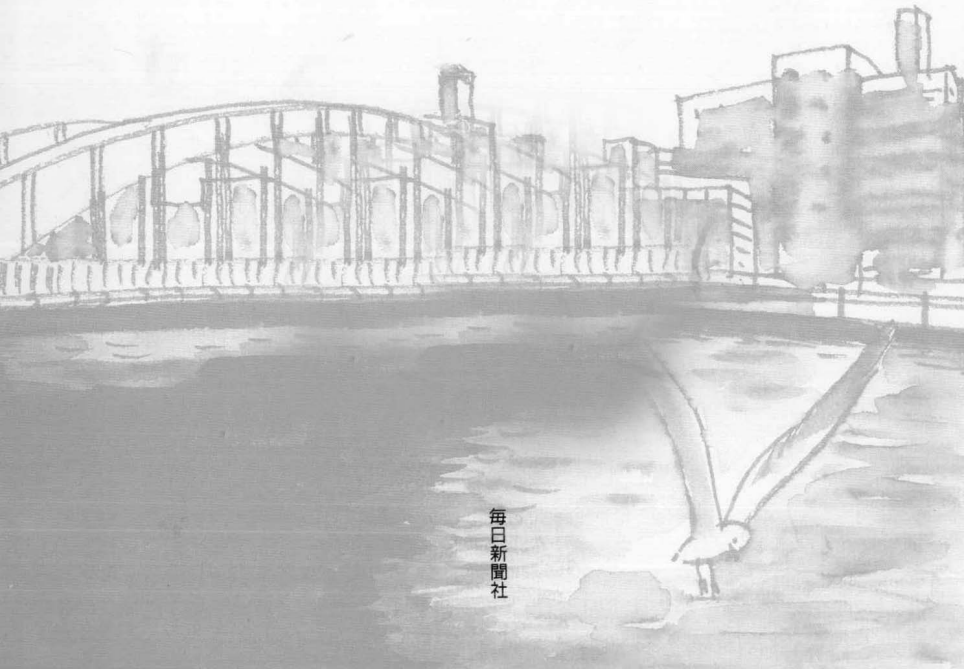
イーストサイド・ワルツ

EAST SIDE WALTZ

小林信彦

イーストサイド・ワルツ・小林信彦



毎日新聞社

著者紹介

小林信彦（こばやし・のぶひこ）

一九三二年（昭和七年）、東京・両国に生れる。早大英文科卒業。翻訳雑誌編集長から作家になる。主な作品は「夢の砦」「ぼくたちの好きな戦争」「世界でいちばん熱い島」「イエスタデイ・ワンス・モア」「ドリーム・ハウス」「怪物がめざめる夜」。

イーストサイド・ワルツ

著者　小林信彦（こばやし・のぶひこ）

一九九四年三月一〇日　第一刷
一九九四年四月一日　第三刷

編集人　吉田俊平
発行人　田中正延
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇-五一　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇-五一　大阪市北区梅田
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅
〈出版局（東京）連絡先〉
書籍営業部03（3212）3257
第一図書編集部03（3212）3239

印刷（本文）精文堂印刷
印刷（カバー表紙）美和印刷
製本　大口製本

ISBN4-620-10498-1

©Kobayashi Nobuhiko 1994　Printed in Japan

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします（毎日新聞社）

目次

プロローグ　7
第一章　見知らぬ街　20
第二章　山の手の生活　36
第三章　風光る　54
第四章　眩暈（めまい）　75
第五章　変化　94
第六章　下町の友人　112
第七章　霧の中　130
第八章　迷路　150
第九章　都内の旅　174
第十章　暗渠（あんきょ）　194

第十一章　曙光　235
第十二章　冷夏　264
第十三章　祭りのころ　299
エピローグ　316
あとがき　324

装画　川村みづえ
装幀　多田　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イーストサイド・ワルツ

自分は浅間しいこの都会の中心から一飛びに
深川へ行こう――深川へ逃げて行こうという
押えられぬ欲望に迫められた。

（永井荷風　「深川の唄」）

プロローグ

「爪を見せていただけますか」
五十がらみの女に言われて、男は右手をさし出した。石鹸で洗って、濡れたままだった。
「失礼しました」
女は棚からタオルをとり、男に渡した。
「爪をのばしたままの方がいらっしゃるもので」
男はゆっくり手をふいた。〈館〉にくるのは何度目かだが、こんな注意を受けたのは初めてだ。
「いま、仕度をしておりますから、ソファーでお待ちいただけますか」
いわれた通り、男は廊下の半分を占領する小さなソファーにかけた。若い娘が冷えた麦湯を運んでくる。
飲んでも大丈夫かな、という気がした。
大した金もクレジット・カードも持っていない。自分を眠らせてプラスになることは何もない

はずだ。そう考え終る前に、男は麦湯を口にしていた。のどの渇きがひどい。
外の温度から考えられぬほど冷えびえしているのは、戦前からのビルのせいだろうか。戦前は倉庫であり、戦後のある時期にアパートに改造されたと友人に教えられた。男に〈館〉の電話番号を教えたのはその友人だった。
中年女は何者だろう。若い娘もここの部屋で働いているとは思えない。手伝いにきているのだろうか。
すべては男に関係のないことだった。
それにしても、と男は考えたくない領域に踏み込む。おれはひどく追いつめられている。追いつめられていなかったら、こんなところにはこない。冷えびえしているのはここの空気だけではない。
「どうぞ」
中年女が声をかけてきた。
男がおもむろに立ちあがると、寄りそうようにしてささやく。
「女の子に話しかけてやってくださいね。怯えますから」
男はうなずいた。以前、中年の店長に同じことを言われた。
「つきあたりのドアです。では、ごゆっくり……」
男は歩き出す。ドアまではほんの数歩である。
把っ手をひねり、ドアを引く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

部屋はうす暗い。部屋の狭さをかくすためかも知れない。桃色の明りがベッドの頭のほうにあり、アイマスクをしたネグリジェ姿の娘がベッドに横たわっている。

ドアをしめた男は、小さな声で、やあ、と言った。娘はかすかな声で、こんにちは、と答える。

奇妙な光景だった。男と女がこんな風に出会う場がほかにあるだろうか。

話しかけないと相手が怯えるのはわかる。アイマスクをした娘には、入ってくる男の年齢、姿、職業がまったくわからない。彼女は闇の中に沈んでいるにひとしい。入ってきたのは犯罪者かも知れないのだ。

男にとっても不便さは似ている。大きなアイマスクがひたいから鼻筋までおおってしまうと、娘の容貌の見当がつかなくなる。だが、文句をいうわけにはいかない。それが〈館〉のルールなのだから。

「からだが冷えないか」

男は言った。

「私は大丈夫」

娘の唇が動く。甘えた声だった。

「でも、そう言うお客さんもいる。こないだまで、暖房が入ってたの」

男はシャツを脱ぎ、ズボンを脱ぐ。ブリーフだけになった。

「風邪をひかないだろうな」とつぶやいて、娘の横に寝る。

壁には〈首から上へのキス、とくに唇へのキスはご遠慮ください〉と書いてあり、娘の手のと

どくところに非常用ブザーがあった。
「いくら春でも、暖房ぐらいサーヴィスすればいいのに」と男はぼやいた。「殺風景すぎる」
「怒る人も、たまにはいる。つまらない店だって……」
「だろうな」
「でも、大半は常連さんだから……」
娘は言葉を切った。あなたも常連でしょう、と言われたようなものだ。
男は暖房などどうでもよかった。中年女の注意とはちがう意味で、相手とのコミュニケーションがないのはまずいと思う。だいいち、自分の居心地が悪い。
「こういう店が他にもできたらしいね」
ネグリジェのボタンを外しながら男は言った。
「知ってる?」
「うん」と娘は言う。「でも、そういう店は、女の子が素人じゃないんですって」
おそれいった、と男は苦笑する。〈館〉は女の子が素人というのが売り物だが、プロと素人の区別はどこにあるのだろう。
「きみは素人か」
「アルバイトよ」
「じゃ、本業は?」
「学生よ。あ、狡い……」

「べつに聞き出すつもりはない」
と男は言った。
本当だった。娘が昼間どのような姿でいるのかというような好奇心は持たなかった。〈きみのようにかわいい娘がどうしてこんなことをしているの?〉という英語のきまり文句があるのを男は知っている。プロと素人という二分法が成立していた時代のもので、いまや、ジョークかもじりでなければ言葉にはならない。
その言葉を男が娘にささやくとしたら、やはり、アイロニーでしかない。しかし——ささやきかけることはないだろう。かりに冗談にせよ、相手を傷つけるのは確実であるから。
男は娘の胸に触れ、乳首を唇ではさむ。そして、舌を動かす。娘はかすかに身じろぎした。
やはり不思議だった。男と女がこのような〈最初の接触(ファースト・コンタクト)〉をすることが東京以外の都市で在(あ)るだろうか?
乳首が立ってくる。男はそれを珍しいもののように感じた。唇をはなして、桃色の乳首を見つめる。
(自分のような男がどうしてこんなことをしている?)
男は自分に問いかける。性に飢えているともいえないおれが何をしているのだろう。
「きみはセイコか」
男はたずねた。娘の唇と歯の具合が似ていた。
「ちがう……」と娘は言う。「セイコさんはやめたわ」

「失礼なことを言った。あやまるよ」
「さいきんきたの、私は」
「ごめん」
「いいの。ここは、しょっちゅう、ひとがかわるから」
「そうだろうな」
男は思わず言った。
「いくらアルバイトといっても、問題があるだろうし」
「車のローンのためよ。学生にしては贅沢な車、買っちゃったから」
「首が凝っているな。車のせいか」
「乱視なの。それでバイクに乗ってるから……」
バイクと車か、と男は嘆息する。おれの大学時代にはバイクも買えなかった。
「目が疲れて……」
乱視の目を見てみたい、と男は思った。が、それは〈館〉のルールに反するし、野暮な客と思われたくない。
男は腕時計を見た。時間は充分にあった。
会話を交したためか、肉体がみちてくる気配が感じられた。しかし、唇がだめ、交わりがだめでは、ふるまいようがない。
男の気配を察したのか、娘はしばらく沈黙した。

やがて、思いきったように、「棚の上にあります」と言った。
「え？」
「コンドーム」
「いらない」と、男は言った。高校生ではあるまいし。
血が頭にのぼってくるようだった。不能者の歪んだ攻撃性がわかる気がした。
男は右手の親指を娘ののどに当てた。
「動くなよ」
低く、ささやいた。
「ブザーに手をのばす前に、息が苦しくなる。それでもよければ、手をのばしてみろ」
娘は手をのばそうとする。男は左手でおさえ、右手の指を強く押しつけた。
「首をしめると後が残る。こうすれば、跡が残らない」
男には娘の恐怖がわかった。
「なにを……するの」
ようやく、言った。
「冗談だよ」
男は娘の右手をおさえつけたまま、親指をひいた。そして、娘の手に大きな札を握らせた。
「チップを先に渡しておく」
「どういう人なの、あなた？」

「こういう人」
男は娘の髪をなでる。
「店のルールは守っている。のどに指を押し当ててはいけないとは書いてない。書いてないことを、時間一杯やるのがおれの趣味さ」
「なんか気味が悪い」
「ふつうさ。ふつうの人だ」
男は丹念に髪をなでてやる。
「きみがふつうの学生であるように」
「……そうかしら」
娘はまだ怯えている。
「信用できないか？」
「わかんない」
と言いながら、チップを枕の下に入れた。
「ここにくる他の人たちと同じだよ」
ささやきながら、男は娘の脇腹をなで始めた。
「他の人はおとなしいわ」
「変なことをしようとするだろう。おれはしない。ルール通りにしている」
「それがこわいよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com